

## 中原 泉

近代解剖学は、リアリズム絵画の協力なくしては生まれな。

A. Vesalius (一五一四—一五六四)は一五四三年、解剖学書『人体の構造に関する七章の書』(通称『the Fabrica』)をバーゼルで出版した。同書の三百余枚におよぶ木版の解剖図は、Stephan van Kalker (Calcar・一四九九—一五四六)らが画いた。彼はルネッサンスの巨匠Titianoに師事したフランドルの画家であった。

彼らは人体解剖の観察所見を、L. Da Vinciの透視図法を用いて、巧緻で美麗な芸術性高い図に表現した。『the Fabrica』は解説・傍注・図版を周到に構成した解剖学書であったが、とりわけ屍体に動的な所作を与え、いわば“生きてゐる屍体”という意外性と寓意性を誇示した。

彼らの解剖図は、その斬新さをもって人々を驚嘆させ、その美術性をもって人々を魅了した。

Vesalius から一四二二年後の一六八五年、オランダのGovard Bidloo (一六四九—一七一三)は、『一〇五図の人体解剖学』(以下『一〇五図』)というをアムステルダムで上梓した。彼がVesaliusを越えるべく企てたのは、図版に簡明な注釈を付した銅版の解剖図譜であった。同図譜は屍体の一部にスポットを当てて、徹底して即物的なスケッチを顕示し、陰影や小道具を用いた誇張した筆致ながら、感情移入のない乾いたリアリズムを迫真的に実写した。

前後するが、解剖図の成否は画家の力量が左右することをVesaliusに学んだBidlooは、一流の画家Gérard de Lairesse (一六四〇—一七一一)に白羽の矢をたてた。

Lairesseは一六四〇年、ベルギー東部のリエージュに生まれた。彼は画家であった父親の影響をうけて、幼少より絵画に親しみ、青年時代には古典主義的画風に惹かれた。

当時、ヨーロッパには、ルネッサンス後の十六世紀末

に始まったバロック芸術が開花していた。バロックは複雑・華麗・奔放な芸術様式で、絵画では現実性と感受性を強調した華やかな色彩美を描出した。一方、十七世紀からヨーロッパには、バロックの反動ともいえる古典主義が勃興していた。このクラシシズムはギリシア・ローマの古典復古を志向し、明快・節度・調和という形式美を追求する芸術様式である。

本来、バロックは動的不調和と劇的情感を謳い、古典美とは対蹠する芸術思潮である。この相反する二つの時代の潮流のなかにあって、Lairesse はフランス古典主義に傾倒し、リエジュの教会に宗教画を描いて評判をとり、古典を題材とした裝飾画を得意とした。

Lairesse は一六六五年、二五歳のとき勇躍、アムステルダムに移住した。彼はバロックに陶醉していたオランダに、古典主義を移入することになる。のちにBidloo は『一〇五図』の序文のなかで、「私はメスを用いて、すべてをできる限り実物どおりの大きさに、逼真的に描かれるよう大きな努力を払った。それらの図は、現代の画家の偉大な光、Gerard de Lairesse によるものである」と

記した。彼が実物大の逼真的な解剖図を欲し、Lairesse の透徹した写実主義に全幅の信頼をおいていたことが分かる。

足かけ十年をかけて、彼らはオランダ解剖学とオランダ絵画を配剤して、実にリアリスティックな解剖図譜をつくりあげた。それは、医学と芸術の結合であった。

ところで、Bidloo は少年時代に詩文や劇作に熱中し、長じてからも一六九三年にイングランド軍病院の軍医総監に任せられる頃まで、アムステルダム劇場のオペラの歌曲や演劇の台本を書くなど、余技をこえた玄人はだしの才人ぶりを発揮していたという。

そこで、『一〇五図』の一枚から、三百年前に生きたアマチュア芸術家 Bidloo と、リアリズム画家 Lairesse の活動の一端を甦えらせてみたい。

(日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館)